

実施報告書

HT25013

【プログラム名】音声会話も手話もできない人と話するにはどうしたらいい
でしょうか？



開催日：平成25年8月4日(日)
実施機関：宮城教育大学
(実施場所)
実施代表者：水谷 好成
(所属・職名) (教育学部・教授)
受講生：小学生21(小3～4:2名含む)
中学生12名
関連URL：http://renkei.miyakyo-u.ac.jp/hirameki/sub1_mizutani.html

【実施内容】

【プログラムの構成や実施において、留意・工夫した点】

- ・講義(話)だけで小学生の集中力を持続させることは難しいので、講義と工作(実習)を組み合わせるようにした。講義における説明の後、実際に実習によって、その内容を確認させるようにした。
- ・工作部分では、ものづくりの楽しさを体験させるようにした。製作した補助装置は、ブザー音を出したり、音声を録音・再生できる装置であり、教室終了後でも、いろいろな遊びに使えるようなものにした。音声再生装置の活用の事例としてメッセージカードも取り入れた。基本要素に飾り要素を加えて、工作の楽しみの要素を加えた。
- ・コミュニケーション実習を実施するために、男女別のペアができるようにグループにし、不足は学生補助者を会えた。各グループに配置する学生(TA)の人数増やして、作業の補助や話し合いの誘導をさせた。

【スケジュール】

- 10:00～10:10 開講式(挨拶, 自己紹介)
10:10～10:50 講義1「音声を出せず手話もできない人とコミュニケーションすることはできるでしょうか?(村上由則)」
11:00～12:00 実習1「スイッチ操作で動く簡単な意思伝達装置の製作とそれを使ったコミュニケーションの体験(水谷好成)」※ブザーを使った補助装置の製作
12:00～13:00 昼食 (クッキータイム)
13:00～14:30 実習2「代替音声の発生機能(VOCA)を持った補助装置の製作とそれを使ったコミュニケーションの体験(水谷好成)」※音声メッセージカードの製作、簡易型音声録音再生装置(VOCA)の製作
14:45～15:00 講義2「YES/NOの合図から音声を代替するコミュニケーション補助装置への発展(水谷好成・村上由則)」
15:10～15:20 休憩(アンケート)
15:20～15:30 閉講式(修了証書の授与)

【実施内容(様子)】

講義1「音声を出せず手話もできない人とコミュニケーションすることはできるでしょうか？」

音声会話ができない場合のコミュニケーションの方法を考える上で、シンボルによる内容伝達方法について学び、音声会話だけがコミュニケーション手段ではないことを確認した。次に、「はい・いいえ」だけで答えるコミュニケーションについて紹介した。「はい・いいえ」で答えられる質問を繰り返すことで、回答者から答えを導き出すことができる。「はい」と「いいえ」を表現する方法としては色々あるが、ジェスチャーなどで回答をさせる方法を練習した。コミュニケーションを補助する装置としては、「はい」「いいえ」を単純な音で表す簡易的な装置から、コンピュータを使って、文章を作る装置まである。その幾つかを紹介した。設問の方法(手順)によって、「はい」「いいえ」だけで回答を得ることができることを学ぶとともに、その難しさについて考えさせることができた。



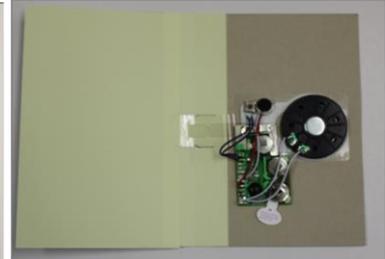
実習1「スイッチ操作で動く簡単な意思伝達装置の製作とそれを使ったコミュニケーションの体験」

手指のわずかな動きで操作できる装置を使えば、はい・いいえを相手に伝えやすくなる。簡単な装置として、電子ブザーを使った補助装置を製作した。ブザーと電池ボックス、スイッチを組み合わせる簡単な装置である。簡単なはんだ付けとグルーガンによる部品の固定だけで装置を製作できるように工夫した。道具の操作に慣れない参加者のために、道具(ワイヤーストリッパ、ハンダゴテ、グルーガン)の使用方法的説明をできるだけ丁寧にし、慣れない子供達にやけどをさせないように注意した。



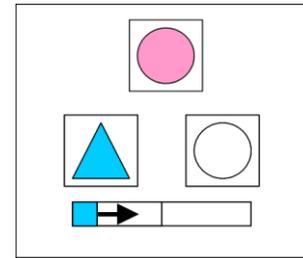
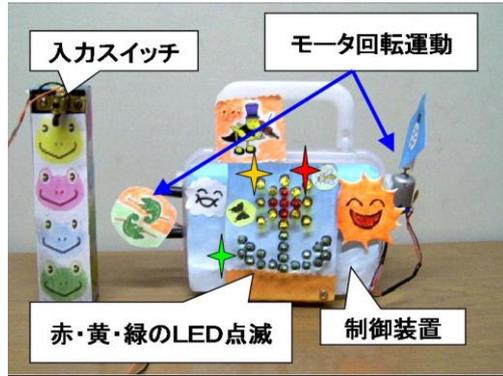
実習2「代替音声の発生機能(VOCA)を持った補助装置の製作とそれを使ったコミュニケーションの体験」

音声を録音して、カードを開くことで相手に伝えるメッセージカードの工作、および、ボタン操作で音声を録音、再生するメッセージ装置の2種類を製作して、それらを使ったメッセージの伝達を体験させた。音声の録音、再生という同等の機能を持っているが、使い方は様々である。これらの装置が、メッセージを伝える補助装置へとつながることを学習した。

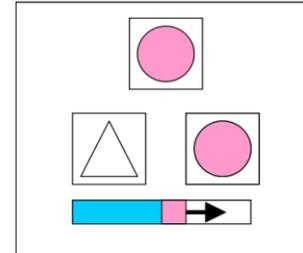


講義2「YES/NOの合図から音声を代替するコミュニケーション補助装置への発展」

指先しかほとんど動かない子供の補助装置の開発に関するこれまでの経過を説明し、この教室で作った装置の関係を説明した。科学技術が、これまでできなかったことをできるようにしていくことを考えさせた。



(a)



(b)

閉講式(修了証書の授与の様子)



【事務局との協力体制】

- ・研究・連携推進課研究協力係が、委託費の管理と支出報告書の確認・振興会への連絡調整および提出書類の確認・修正等を行った。
- ・担当が、大学HPへの募集案内の掲載を行った。

【広報活動】

- ・実施担当者が中心になり、仙台市・宮城県教育委員会と連携して、小学校を介して募集の広報(チラシ配布)をした。幾つかの学校については、小・中学校に直接チラシを持参して配布を依頼した。
- ・大学のHPを介して、事業(プログラム)の内容や募集についての広報活動(インターネットを利用した募集活動)を行った。本学で実施するひらめき☆ときめきサイエンスの教室をまとめたポスターを作成し、配布をした。
- ・新聞(河北新報)による募集広告(3回)とフリー広報誌(ままばれ)で募集案内を掲載した。

【安全配慮】

- ・実習中の安全確保としては、最低、受講者2人に対して1人程度の協力者(学生)を配置した。グルーガンやハンダごてなど、扱いの注意が必要な道具については、作業前に、安全な使い方を詳しく説明した。小学生には同伴の保護者にも注意をさせるように指示をした。参加者、付き添いも含めて傷害保険に加入させた。実施中の昼休みにやや大きな地震があったが、安全確保の指示を適切にでき、問題なかった。

【今後の発展性、課題】

- ・昨年度、兄弟が参加した本教室の内容がとてもよかったため、他の兄弟姉妹が参加したケース、同じ参加者が再度参加したいという感想も今回もいただいた(今年度も参加したいという連絡があった日程が合わずに参加できなかった方もいた)。この教室の意義を伝える難しさはあるが、参加者が新たな参加者を連れてくるケースが出ている。新しい内容も加えながら、再度参加した方でも新しい発見があるように教室内容を工夫していくことも重要である。

【実施分担者】

村上 由則
菅井 裕行

教職大学院・教授
教育学部・教授 (事前準備のみの協力)

【実施協力者】 17 名

【事務担当者】

中嶋 恵里

研究・連携推進課 研究協力係